

## 令和4年度第1回真の幸せ（ウェルビーイング）戦略プロジェクトチーム議事要旨

日時：令和4年8月4日（木）10:00～12:00

場所：富山県庁4階大会議室（一部オンライン）

### 議事(1)成長戦略WGの見直しについて（資料1）

#### （事務局説明）

- ・ 5月に開催した成長戦略会議での議論を踏まえ、ワーキンググループを発展的に解消し、新たにプロジェクトチームを設置したこと。
- ・ 真の幸せ（ウェルビーイング）戦略プロジェクトチームは、前ワーキンググループからメンバー変更がないこと。また、令和4年度アクションプランのPDCAや令和5年度以降の取組方針について議論していくこと。
- ・ 本プロジェクトチームに少子化対策・子育て支援に関して議論するための専門部会を設置すること。

を説明

#### （委員の主な意見）

- ・ 県民のウェルビーイング向上については、KPIの目標に合わせ5年間の取組みをずっと追っていきたい。5年間の流れの中で、初年度にどうするか、2年目にどうするかというところを考え、最終的に5年後には現状よりかなり良くなっている状況を創出したい。
- ・ 子育てのDX化が必要と感じている。市町村は今後出産予定の女性のデータを取得できるので、そのデータと様々な子育て支援施策を結びつけ、最適な時期に最適な情報を届けられる体制を考えていけないか。
- ・ 子育てについて大学生と子育て中のママさんの意見を聞くと、コロナによる経済的なダメージもあり、お金に関する不安がかなり強い印象。子育て応援券などの支援制度があるが、これまで大きく変わらずにきているので、世の中の変化に応じて見直す必要があるのではないかと。思い切った子育て世代への金銭的な支援があれば、富山の魅力を全国へPRできるチャンスになる。
- ・ ウェルビーイングは全世代に関わることであるが、これからの未来のことを考えると、必ず若い人や出生率の話になるので、この切り口でやっていくことは大事。
- ・ ウェルビーイングの指標というのはとても難しく、富山県が何をもって指標とするか非常に重要。県民にとって分かりやすいことが重要であり、その切り口の一つが表現。県民だからこそその表現があると思うので、そういったもので共感できると分かりやすさも増すと思う。指標の数値化とともに、表現の視点も入れていけばよいと思う。
- ・ ウェルビーイングという言葉が、富山県の生活者から見たときにちょっと宙に浮いているので、生活者から見たときに自分たちがどういう暮らしを目指せばよいか分かるキャッチコピーを提案したうえで、発信・広報することが必要。富山県で暮らしている人たちが分かりやすい言葉に置きなおすことが大事。
- ・ 若い女性は未来をつくる世代であり、その彼女たちが富山県で好きに暮らせるという環境づくりができればいいと思う。若い世代が定着するために、より若い高校生に着目してはどうか。

## 議事(2) 令和4年度成長戦略アクションプランの推進・検証について(資料2、資料3)

### (事務局説明)

- ・ 資料2記載の各事業の概要、現時点での進捗状況について説明
- ・ 資料3のウェルビーイング県民意識調査の内容及びウェルビーイングに関する普及啓発の取組みについて説明

### (委員の主な意見)

- ・ ウェルビーイングの県政番組や県広報紙での普及啓発については、シニア世代にしか届かない方法と感じた。インスタとかSNSも使って周知していく方法がプラスして必要。また、今年はデザイナーを入れてウェルビーイングという見せ方を作り上げていく段階だと思う。
- ・ 成長戦略カンファレンスは意識の高い人たちでしゃべってる感じなので、より住民たちが入っていける雰囲気づくりを心掛けてほしい。
- ・ ウェルビーイングの調査設計自体は、どこに出しても恥ずかしくないものができている。
- ・ ウェルビーイングというなじみのない概念を県民に広報するには、とにかくその接触回数を増やすことに尽きると思う。調査側からできることは、調査頻度を増やしてその都度広報し、接触頻度を増やすこと。全体のウェルビーイング広報戦略を練るうえで、調査回数をどうしていくか議論が必要。
- ・ ウェルビーイングの調査結果について、市町村ごとの順位は公表できないか。下位の公表に支障があるなら、例えば上位3位までを公表するとか下位のところは対策も含めて公表するなどいろいろなやり方があると思う。
- ・ ウェルビーイングの調査内容は、過去、現在、未来というところから、マズローの欲求5段階を使いながら、支える、広げる、高める、そしてつながりというところまで、まさしくウェルビーイングの本質的なところを聞けるものだと思う。
- ・ ウェルビーイングの調査結果は、県民がどう感じているかのデータであって、本来のウェルビーイング又は私たちが目指しているものと全く同じではないかもしれない。なので、意識を向けるきっかけ、みんなの関心があるのはこのエリアなんだということのきっかけ、マジョリティを掴むという意味で、このデータを使っていくという意識を持っておく必要がある。そして、この結果の見方や使い方について、県民に伝えながら一緒にやっていくという草の根の活動が必要。

## 議題(3) 令和5年度以降に取り組む事業の検討について(資料4)

### (事務局説明)

- ・ 資料4に基づき、重点施策分野として、①県民のウェルビーイングの向上、多様性の促進、②女性のウェルビーイングの向上、働き方改革・ワークインライフの推進、に取り組むこと、及びそれぞれの現状分析について説明

### (委員の主な意見)

- ・ 行政ではPDCAをよく使うが、これはもう古くて最近ではOODA(ウーダ)という考え方で物事を進めている。先にプランだとそこではじかれるものがあり、それが先進的なものであったりする。せっかく富山県で先進的な考え方やアクションが始まっているのだから、OODAを取り入れると令和5年度以降のものも変わってくるのではないかと思う。

- 子育てでは、子育て支援センターと保健センターとの連携、子育て支援がシニア世代というイメージの撤廃につながる活動、これから親になる中高生が子育て支援をしている場に参加できる機会をつくるといった事業をしてほしい。
- 地域の行事が高齢者に仕切られていて、若い世代には発言権がなく、地域の為に能力を生かせる機会がない事が、若い世代のウェルビーイングが下がる根本にあると思う。県という大きな単位で変わっていくためには、集落・市町村という小さな単位を地道に変えていく必要がある。  
(県として目指すべき方向を示し、目標達成市町村・地域を表彰するなど、) 地域の中心を現役世代に戻す為の「世代交代を促す仕組み」が必要。
- ビジョンセッションのメンバーと話している中でよい意見がでていますが、県に伝える場がない。富山県の県民コンペティションみたいなことができれば、意識向上にもつながるし、よいと思う。
- ウェルビーイングの庁内広報はすごく大事なことだと思う。ウェルビーイングを進めている県庁の職員が楽しそうというのは、県民にすごく影響がある。広報の原理原則では、企業広報で社内を固めるのはすごく大事で、ビジョンが浸透している会社は事業が強いし、人材を確保できる。
- ウェルビーイングのテレビ番組で、県庁の人が出たらいいのではないかな。
- ワークインライフという言葉が去年から採用したこともあり、やはりライフがすごく大事となったときに、働き方改革という言葉が入ることで、女性が職場で活躍してくださいというメッセージ性がとても強く出る。女性に限らず男性でも、自分がどこで活躍したいかという選択肢がもう少し広がるような表現が組み込めないかな。
- 富山県は割と女性のほうが家庭の負担が大きいとの話があるが、これを夫婦の問題として解決しましょう、ではなく、地域で解決することが求められていると思う。女性が地域に子育てや家事を頼ったことにより気持ちに余裕が出てから、社会に出てみようという段階に進む。家庭の問題や子育ての問題を夫婦で解決しなさいと言われ、職場復帰して活躍しなさい、というのはプレッシャーが大きい。
- 女性管理職を増やすには、女性の意識改革がすごく大事。ただ、女性社員にとって管理職になることが本当に自分にとってウェルビーイングなのかというところが、本人自身が考えたことがないし、できれば今の状態のほうが自分は幸せだと思っている人がすごく多いと思う。  
やはりウェルビーイングを高めて自己表現をしていくことをせっかくだから目指そうという教育、そういう意識改革を促すようなものがあると、ウェルビーイングを高めようとする意識の中に、管理職になって自分の可能性をもっと開花させて、できることを増やしていこうということにつながる。教育もすごく大切だし、仲間と一緒に自分のウェルビーイングを高めていく仕組みがあると、必然的に管理職になりたい人も増えていくと思う。
- ウェルビーイングというなじみがないものを富山県民全体にどう実感してもらうかというときに、ウェルビーイングを実感できる象徴的アクションを全県民が納得できる形、実感できる形でやる必要がある。日常生活でそれは何かといえば食。食は誰もが毎日体験することであり、特に料理、それも男性が料理をすること。料理頻度の男女格差は、日本は世界的にも極めて大きい。この格差が小さいほど社会全体のウェルビーイングが高いという研究結果もある。男性が料理をすることで、マズローでいうと自分だけじゃない、みんなのためになっていくという自己超越にもつながる。

- ・ 重点戦略としての女性に限らず、富山県民がウェルビーイングを実感できるようなシンボリックアクションを意識しながら事業に取り組んでいただきたい。